7 月 16 日のメッセージ

聖書：ガラテヤの信徒への手紙　6：　1 – 10

「善を行いましょう」

「幸運の女神には前髪しかない」と言われます。一度逃したチャンスは二度とやってこない、と。

サウルがダビデを部下として持ってから、イスラエルは連戦連勝。人々はサウルよりもダビデを讃えるようになりました(「女たちは楽を奏し、歌い交わした。『サウルは千を討ち／ダビデは万を討った。』」サムエル記上 18:7)。もちろんサウルは面白くありません。あの手、この手でダビデを亡き者にしようとします。

一方、ダビデの部下たちも良い気はしなかったでしょう。なぜ、功績を挙げているのに命を狙われなければならないのかと憤ったはずです。そこに、千載一遇のチャンスが訪れます(「サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが……」サムエル記上 24:4)。兵士たちはいきり立ちますが、ダビデは冷静でした。いや、サウルの上着の端を切ったことさえ後悔したほどでした(「ダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。『……わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。』」サムエル記上 24:6-7)。人間の目には確かにチャンスだと映りましたが、今は神の与えられた時ではないということがわかっていたのでしょう。だから、サウルに声までかけたのでしょう(「サウルの背後から声をかけた。『……あなたを殺せと言う者もいましたが、あなたをかばって、……言い聞かせました。』」サムエル記上 24:9-11)。そして、このダビデの姿に、さすがのサウルも反省したのでした(「サウルは声をあげて泣き、『……お前はわたしに善意をもって対し、わたしはお前に悪意をもって対した。』」サムエル記上 24:17-18)。

人はどうして、「自分さえ良ければ」から脱することができないのでしょうか。

一人の「罪深い女」がイエスの足を涙で濡らし、髪の毛で拭った時、ファリサイ派のシモンは面白くありませんでした(「この町に一人の罪深い女がいた。……香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」ルカによる福音書 7:37-38)。イエスのことを認めて家に招待して、食事まで提供しているのに、イエスの関心が自分ではなくこの女性に向いていたからです(「『この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに』と思った。」ルカによる福音書 7:39)。

イエスはこの自己中心的な思いを見抜いて「赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」(ルカによる福音書 7:47)と言われます。人の思いではなく、神の思いに触れる絶好のチャンスだったのに、あなたはそれを逃したのだ、と。

パウロも、自分からチャンスを手放そうとする仲間がいるなら引き戻せ、と勧めています(「万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、……そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。」ガラテヤの信徒への手紙 6:1)。せっかく神がよりよく生きるように、より豊かに生きるようにと招いておられるのだから、その思いに応える、応えようとする一人ひとりであってほしいと願っています。

「たゆまず善を行いましょう。」(ガラテヤの信徒への手紙 6:9)

チャンスを逃さないためには、絶えず神に聞き、イエスの思いに聞きながら、応えていくしかありません。隣人のために善き働きを成し続けるしかありません。しかし、現実はそのような熱い思いに冷や水を浴びせ、足を引っ張ろうとしてきます(「わたしは彼らの幸いを願うのに／彼らは敵対するのです。」詩編 38:21)。偽善だと揶揄して、思いをくじこうとします。

けれども、私たちは知っているはずです。チャンスはその時にしかないことを。

イエスは目の前にいる命と常に全力で向き合われました。助けを必要とする者がいれば、誰に何を言われようとも手を伸ばされました。

そのイエスに救われた、赦された、活かされた私たちはそのイエスの心を知っています。私たちも目の前にある命と、助けを求める声と精一杯向き合い、善を行い続けましょう(「ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。」ガラテヤの信徒への手紙 6:10)。